

講 評

第13回文化賞

2010年9月2日記者発表での各選考委員のコメントから抜粋(文責:編集部)

■選考委員長

色川 大吉 (歴史家)

■選考委員

鎌田 慧 (ルポライター)

中山 千夏 (作家)

土橋 寿 (日本自史学会会長)

秋林 哲也 (編集者)

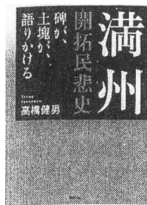
小飯塚一也 (ライター)



応募総数641点のうち226点が第1次選考を突破し、うち64点が第2次選考を通過し入選。最終選考会で大賞、部門賞、特別賞、計10点が選ばれた。

部 門 賞

研究・評論部門



書名 満州開拓民悲史 一碑が、土塊が、語りかける 13-8257-05

著者名 高橋健男 (新潟県)

発行社(者) 批評社 印刷所 理想社

サイズ 四六判 ページ数 370 発行日 2008.7.10 定価 3150円 HP登録済

内容紹介 満州開拓民に何が起こったのか、中国残留孤児はなぜ生まれたのか。日本敗戦後の中国黒龍江省方正で酷寒の越冬中に約5000人の避難民が斃れた。それらの人たちは今、中国国内唯一の「日本人公墓」に眠る。方正に集結した開拓団避難民のことを中心に据え、満州開拓民の困苦・悲惨を解き起こし、後世に伝える。

研究・評論部門

『満州開拓民悲史』

一碑が、土塊が、語りかける—

高橋健男 (新潟県)

第2次選考を通過した研究・評論部門の入選作品10点の中から、高橋健男さん(新潟県)の『満州開拓民悲史 一碑が、土塊が、語りかける—』を部門賞に選んだ。

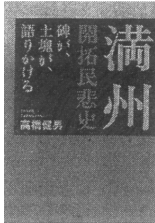
高橋さんは1946年、戦後生まれの元教員で校長先生なども歴任された方。旧満州



についてはライターやカメラマン、当事者などいろんな方が書いているし、社会的にもいわゆる残留孤児や帰国された方々の悲話が伝わっており、今も残る問題だ。高橋さんは膨大な資料をほとんど網羅して、実際にいろんな開拓地に墓参団とともに訪れて取材をきちんとしている。訪問できなかったところも資料を読み込んで書いており、満州開拓についてのまとめという意味が大きい。聞き取りや撮影などもしっかりした労作だ。

ハルビン郊外の方正というところに中国人が日本人開拓団避難民受難者のために公墓を建てている。日本人は加害者として旧満州を侵略したわけだが、被害者である中国人が加害者の中の被害者、満州開拓団の犠牲者についての歴史も継承しようとしている。基本はもちろん日本による侵略だが、高橋さんが懸命に取材してきたなかに、双方が乗り越え、お互いに変ってきたという「歴史の時間」が反映している。

方正の公墓は最近公開された映画『嗚呼満蒙開拓団』(羽田澄子監督)にも出てくるが、高橋さんはもっといろんな地域を訪れて書かれており、貴重な仕事をされたことを評価したい。(鎌田 慧)



満州開拓民悲史 一碑が、土塊が、語りかける—
研究・評論部門賞

問題の根源を知り後世に伝える

高橋健男



戦後65年の今、戦後生まれの人が全人口の4分の3を占め、戦前・戦中のことは急速に忘れ去られようとしている。しかし満州開拓移民に起因するいくつかの問題は、現在の問題として今も引き続いている。私たちは問題の根源を知る必要がある。

私が満州開拓団関係の調査研究を始めて10年になる。この間、関係者の慰霊訪中への同行、慰霊・親睦の会への参加、個別の自宅訪問や文通により体験を聴取してきた。そしてこれらで知り得た歴史事実を著作と講演で後世に伝える活動をしている。

中国黒龍江省ハルビン市郊外の方正^{フワンチエン}県に、中国人が日本人開拓団避難民殉難者のために建立した「方正地区日本人公墓^{ほうまさ}」がある。中国国内唯一の日本人殉難者のための“おおやけ”の墓である。建立は日中国交樹立9年前のことで、文化大革命期にも紅衛兵による破壊から守られてきた。後年、「麻山地区日本人公墓^{まさん}」や「中国養父母公墓」も建立された。だから今この地は開拓団関係者が必ず立ち寄る慰霊の地、日中友好の原点・象徴の地となっている。しかし、このことは日本国内ではほとんど知られていない。

「中日友好園林」として整備されている墓苑は、黒龍江省ならびに方正県人民政府が維持管理している。本来なら日本政府が責任を持つべきであろうが、支援は筆者も会員である「方正友好交流の会」をはじめとする民間団体や引揚関係者によって細々と続けられてきている。日本政府が支援金支出を決めたのは平成21年10月のことである。

『満州開拓民悲史』は、多くの開拓団避難民が酷寒の越冬生活を余儀なくされたここ方正の地に焦点を置き、そこに集結した避難民の逃避行や収容所生活の困苦、残留婦人の姿などを詳述した。

各種資料、現地訪問、関係者からの聞き取りにより、満州開拓民が陥った悲惨な状況を解き起こし、後世に伝えるものである。

読むほどに滲み出る悲嘆の情念

編集・発行者 佐藤英之 (批評社)

第13回日本自費出版文化賞の「研究・評論」部門で、『満州開拓民悲史』が受賞作品になったという吉報を、高橋健男さんからお知らせいただいた。この本は、本来、自費出版という形ではなく、オリジナル出版として刊行すべきだという想いが強かったので、版元としてはいささか恥じ入る感情と喜びが錯綜して素直に頷けなかった。戦争体験の伝承が希薄化していくなかで、国家の政策で満州開拓に動員された人たちの無念の想いが凝縮されて表現されているこの本は、読むほどに悲嘆の情念^{じび}が滲み出て、落涙なしには読み進めない。高橋さんの誠実で実直なお人柄が偲ばれる秀逸な作品である。

本の刊行と相前後して羽田澄子さんの映画作品「嗚呼 満蒙開拓団^{あ あ まんもう}」が全国上映され、また、高橋さんもかかわっておられる方正友好交流の会の会報「星火方正^{せいりか}」や各地方紙で紹介されて幸運にも重版することができた。この本が若い人たちにも読まれることを祈念して止まない。